

# T S U B O H O R I

平成11年度(1999)

## 姫路市埋蔵文化財調査略報



2 0 0 0

姫路市教育委員会

# はじめに

近年の都市再開発事業や区画整理事業の進展に伴い、姫路市内でも急増する埋蔵文化財の発掘調査。その成果を市民の皆様にご覧いただけるかぎり速やかにお伝えするため、平成8年度より『姫路市埋蔵文化財調査略報』を刊行してまいりました。「TSUBOHORI」の愛称とともに親しまれているものと存じます。

刊行を開始してより、今年度で5年目となりました。その間、下太田廃寺の寺域確認や古網干遺跡における中世の港湾関係遺跡の発見、さらに姫路城内濠からの極楽寺瓦経の出土などの調査成果を報告してまいりました。

今回は、特別史跡姫路城跡のほか中世の坂本城跡、北宿遺跡などについて報告しております。もちろん、調査概要の速報を目的としているため、その内容は必ずしも十分とはいえません。しかし、調査成果の一端を速やかに公開することにより、本市が行っております埋蔵文化財の発掘調査事業について理解を深めていただければ幸いに存じます。今後も、さらに詳しい成果の公開を目指していきたいと存じます。本書が姫路地域の豊かな歴史をひもとかれる機会の一助となることを願ってやみません。

最後に、発掘調査の実施にあたり、ご指導・ご協力を賜りました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

姫路市教育長

高岡 保 宏

## 例 言

1. 本書は、姫路市教育委員会が平成11年度(1999)に実施した埋蔵文化財発掘調査の略報である。なお、特別史跡姫路城跡に関する発掘調査については、『城郭研究室年報』10においても報告している。
2. 発掘調査に伴う遺物・図面類は、すべて姫路市教育委員会が保管している。
3. 遺物の実測図は、弥生土器・土師器は断面を白ヌキ、須恵器は黒、瓦はスクリーントーンとした。
4. 本書の執筆は、各調査担当者が行い、編集は多田が担当した。
5. 平成11年度発掘調査地点の位置図は、国土地理院20万1図を使用した。また、各調査地の位置図は、国土地理院2万5千分1図を使用し、方位はすべて上が北である。
6. 本書の図面は国土座標(第V系)を基準とし、方位は座標北である。また、標高は東京湾平均海水面(T.P.)を使用した。
7. 調査にあたっては、下記の方々・機関の指導・協力を得た。(五十音順、敬称略)  
井上和英、今里幾次、北垣聰一郎、小林基伸、中井 均、藤原 学  
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
8. 遺物の整理および図版の作成には、境野佐知子、佐藤朋子、田中章子、中山美歩、藤戸翼、藤村由紀、圓尾かさね、山田郁子、吉野弘子の補助を得た。
9. 表紙の写真は、姫路城防災センター建設予定地発掘調査の全景を南側から写した写真、裏表紙は坂本城跡第8次調査5区から天神山城を写した写真である。

## 発掘調査の動向

平成11年度は、17件の埋蔵文化財の発掘調査を行った。姫路城関連の調査が8件で、その他の市内遺跡が9件である。市内遺跡では中世坂本城跡の第8次調査があり、城郭関連でまとまった成果があがった。

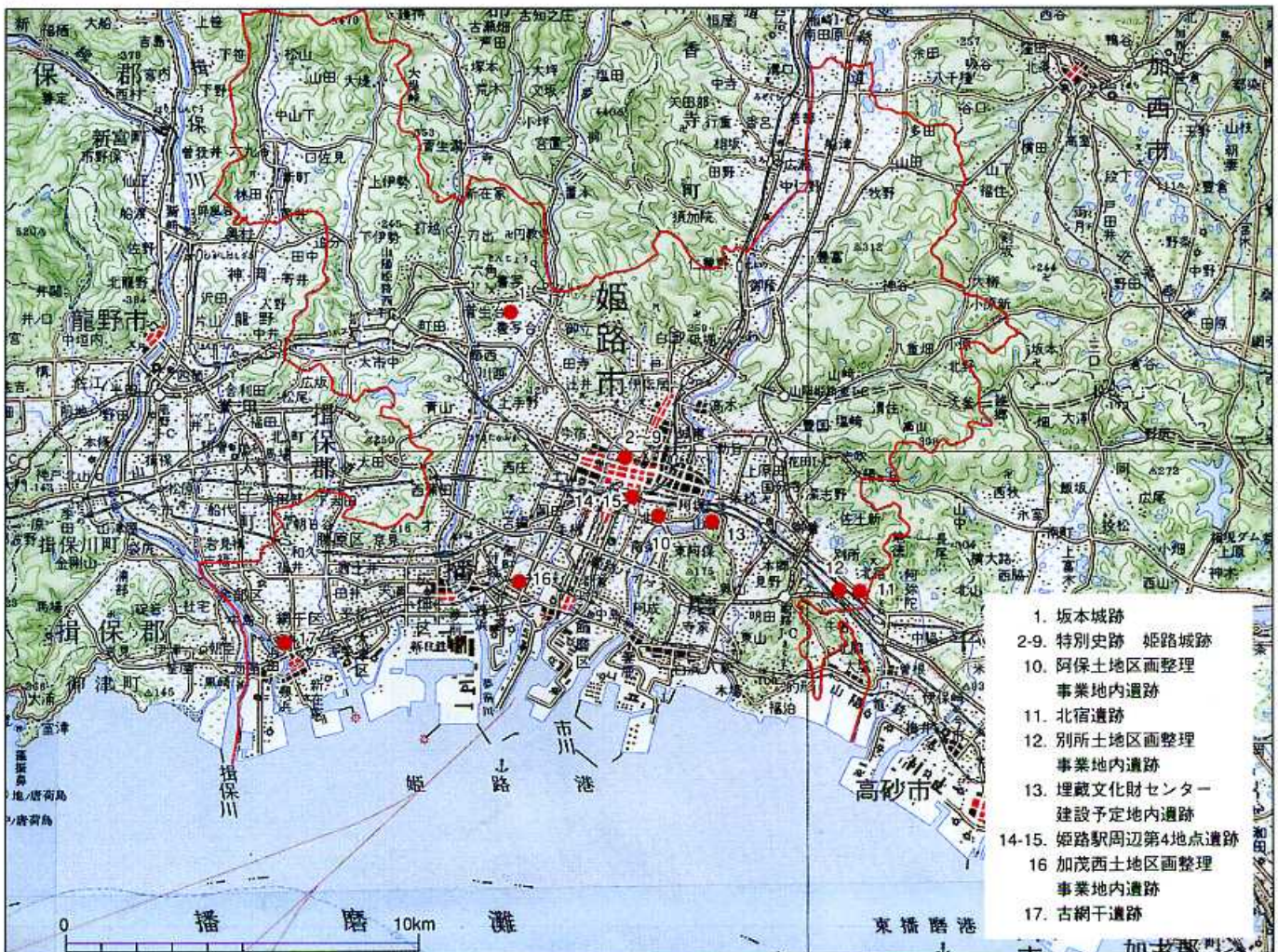
坂本城跡では、第1次調査以来の広範囲の調査を行った。西側土塁の断割りを行い、土塁築造状況を確認した。城の平面プランとあわせて、戦国期における守護所の城郭化についての資料となるであろう。

特別史跡姫路城跡では、中曲輪の武家屋敷地区6ヶ所と城内の西の丸と三の丸の2ヶ所で調査を行っている。西の丸では、平山城の造成で鷲山の岩盤を掘削していた状況が確認された。三の丸の防災センター予定地では、石垣下部の盛土造成手法について調査した。城下町では、大手門南側のA地区で池田輝政の築城以前の初期城下町に関連する溝などを検出している。また、市道城南20号線では土坑から江戸初期の遺物がまとめて出土した。

遺跡の試掘調査は、埋蔵文化財センターの建設予定地のほか、阿保地区や加茂西地区の土地区画整理事業予定地で実施したが、阿保で中世の溝や井戸が確認されたにとどまった。

時代別には中世の遺跡が4ヶ所、近世3ヶ所と中世以降のものが多い。それ以前では、平安時代の木組み井戸や土坑が、別所地区、姫路駅周辺地区、姫路城跡の市道城南20号線などの調査で見つかっている。その中で、坂本城跡下層の書写構江遺跡からは弥生時代中頃の円形周溝墓が確認され注目される。

発掘調査成果の現地説明会は、平成12年3月18日に姫路城防災センター建設予定地で、同じく3月25日には坂本城跡で実施した。坂本城跡では300人余りの見学者があった。



平成11年度 発掘調査地点の位置図

遺跡名	調査回数	所在地	調査面積	調査期間	調査原因	調査担当者
坂本城跡	8次	書写字構江	460㎡	00. 2.24~00. 3.31	宅地造成	大谷 他
(仮称)阿保土地区画整理事業地内遺跡	1次	阿保甲	458㎡	99.10.29~00. 3.17	試掘調査	大谷
北宿遺跡	1次	別所町北宿	686㎡	99.10.13~00. 3.27	下水道工事	小柴
(仮称)別所土地区画整理事業地内遺跡	14次	別所町小林	342㎡	99. 3.31~99. 6.28	区画整理	小柴
(仮称)埋蔵文化財センター建設予定地	1次	四郷町坂元・山脇	23㎡	00. 3.13~00. 3.31	試掘調査	小柴
(仮称)姫路城周辺第4地点遺跡	2次	駅前町・朝日町	1,000㎡	99. 5.20~00. 1.28	区画整理	中川
(仮称)姫路城周辺第4地点遺跡	3次	駅前町	36㎡	99.10. 4~99.10. 8	NTT 管路新設	中川
(仮称)加茂西土地区画整理事業地内遺跡	1次	飾磨区加茂	52㎡	00. 3.17~00. 3.31	試掘調査	秋枝
古網干遺跡	4次	網干区垣内南町	380㎡	99. 5. 7~99. 9.30	区画整理	森・中川
特別史跡 姫路城跡						
国立病院更新整備 7次	179次	本町68	64㎡	99. 5. 7~99. 7. 5	国立病院建替	山本
A地区 都市計画道路城南線整備	180次	本町68	800㎡	99. 7.13~00. 1.14	道路建設	森
市道城南20号線電線共同溝設置	181次	本町68	195㎡	99. 8. 6~99.12.10	電線共同溝	多田
西の丸防災工事	182次	本町68	41㎡	99.10. 2~99.11.30	防災工事	多田
A地区 家老屋敷跡公園整備	183次	本町68	382㎡	99.12. 9~00. 3. 9	公園整備	森
大手前公園地下道建設	184次	本町68	207㎡	99.12.10~00. 2.24	地下道建設	多田
大手前公園園路整備	185次	本町68	63㎡	99.12.16~00. 3. 6	園路整備	多田・森
防災センター整備	186次	本町68	510㎡	00. 1.20~00. 3.27	防災センター建設	多田・森

### 発掘調査一覧

## ●発掘調査の体制

### 教育委員会事務局

教育長 高岡 保 宏  
 教育次長 堀川 修 平(～平成11年6月30日)  
 池田 宏(平成11年7月1日～)

### 文 化 部

部 長 山下 紀 年(～平成11年6月30日)  
 西沢 徹 哉(平成11年7月1日～)

### 文 化 課

課 長 松井 敏 郎

### 事務担当

係 長 中川 秀 昭(～平成11年6月30日)  
 課長補佐 牛尾 誠(平成11年7月1日～)  
 課長補佐 福井 孝 幹(平成11年7月1日～)  
 主 任 柿本 英 夫

### 調査担当

係 長 山本 博 利  
 秋枝 芳 彦  
 技術主任 大谷 輝 彦  
 技 師 多田 暢 久  
 森 恒 裕  
 小柴 治 子  
 技 師 補 中川 猛



姫路城防災センター  
 発掘調査、現地説明会の様子

# 1. 坂本城跡

(第8次)

- 1. 所在地 姫路市書写構江
- 2. 調査面積 460㎡
- 3. 調査期間 平成12年2月24日～平成12年3月31日
- 4. 担当者 大谷、小柴、多田、中川、森

室町時代、坂本城は播磨守護の赤松氏が本拠として使用していた。軍事拠点としての白旗城(上郡町)や城山城(新宮町・龍野市)などの山城と異なり、平城であり政治的な拠点としての性格が強い。

坂本は書写山の南麓に位置し、南北朝時代には新田義貞配下の武将や足利尊氏が駐留するなど、築城以前から発達していた。城は西坂本の段丘端に立地し、西側には書写山麓から南へ開く谷状地形が入り込む。段丘下には条里型地割りも存在し、早くから周辺の開発も進んでいた。

『播磨鑑』など江戸時代の地誌には、応永29年(1422)に築城とある。しかし、それ以前にも守護役が坂本から命じられており(応永4年「矢野庄学衆方年貢等散用状」東寺百合文書)、15世紀初頭にはすでに存在していたようである。



調査地の位置図(「姫路北部」)



坂本城跡(第8次) 調査区配置図 (S=1:1,000)



4区南壁 土塁断割り状況（北から）



5区南壁 土塁断割り状況（北西から）



6区南壁 土塁断割り状況（北西から）



土塁断割り状況（北から）

嘉吉元年(1441)の「嘉吉の乱」では、赤松満祐の本拠となっている。ただ、最終的に満祐は城山城へ逃れ、そこで落城を迎えており(『建内記』他)、このときは戦場にはなっていない。

赤松氏滅亡後、守護山名氏のもとでも、坂本は守護所として利用されたい(『鶴庄引付』他)。

「応仁の乱」後は赤松政則が播磨支配を回復するが、文明15年(1483)には但馬から山名政豊が侵攻し再び坂本城を奪取している。その後は、長亨2年(1488)に政豊が但馬に撤退するまで坂本城が両者の争奪戦の対象となった。

山名氏撤退後の文亀元年(1501)に坂本の堀普請が行われており(『鶴庄引付』)、この頃まで城は存続していた。しかし、戦国期には赤松氏の本拠が置塩城(夢前町)に移るため、16世紀の初頭には坂本城も廃城になったと考えられる。

その後、江戸時代前期までには城の土塁が堤に転用され、城跡内は「構池」と呼ばれるため池となっている。

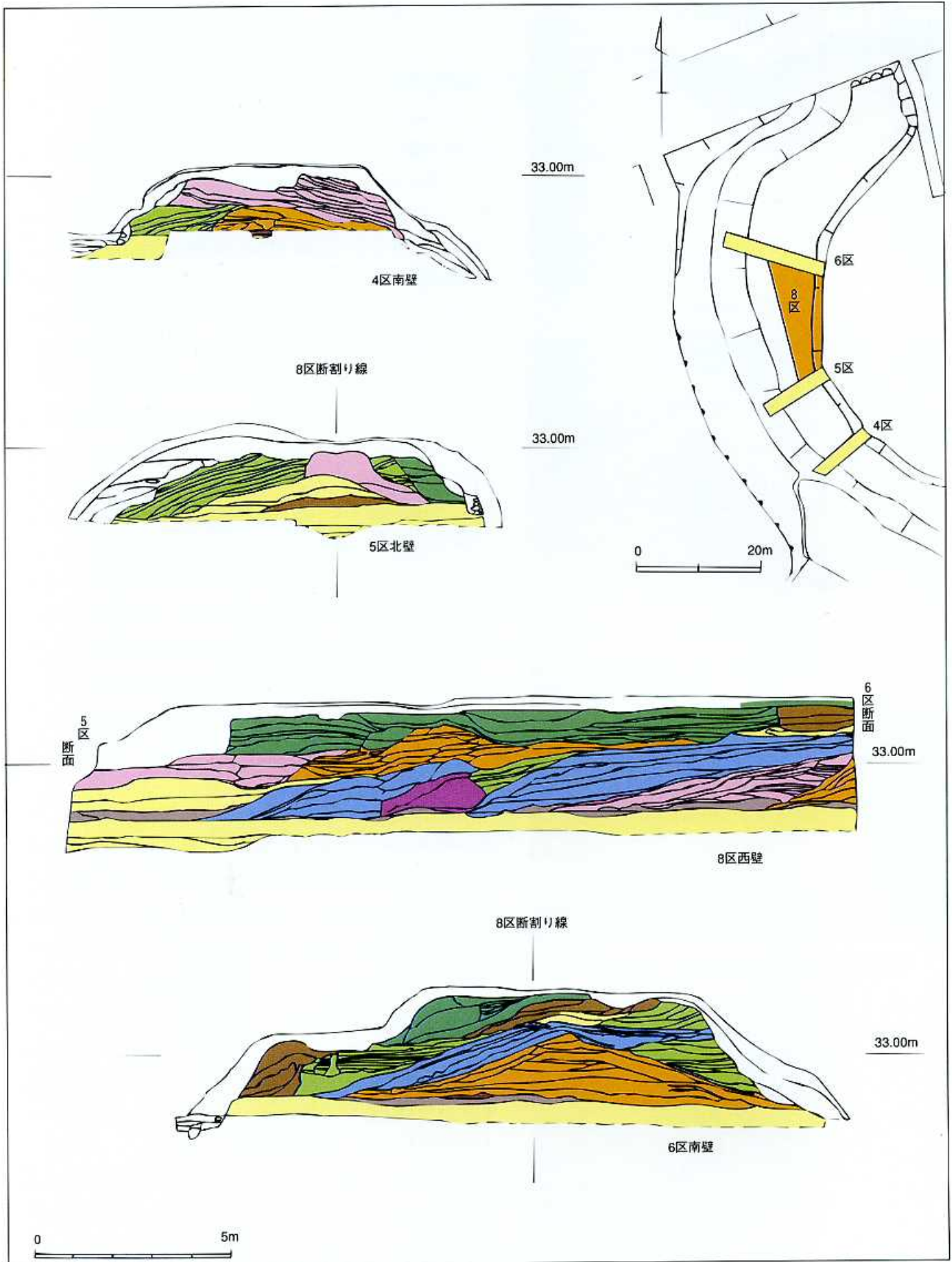
現在、城跡の中央には市道が東西に走り、周囲は水田や宅地となる。城の痕跡としては、西側と南側の一部に土塁と堀跡が残る。市道建設に伴う第1次調査などにより、東側の堀や北東隅部が確認されている。その結果、城は東西・南北約170mのやや歪んだ方形平面のプランであったと推定された。規模・プランとも周防の大内館や淡路の養宜館など室町期のほかの守護所と共通する特徴を示す。

西側土塁は鍵の手状に屈曲し、南側が西へと張り出す。この張り出しの角部は、土塁の上面幅も広がっている。城外への眺望も効き、重要地点であったと考えられる。

調査は城跡内にトレンチを3本設定し、1～3区とする。土塁に対しては、直交方向に幅3mの横断断割りを入れ、4～7区とした。8区は5区・6区間を土塁と平行方向に東側を断割り、土塁中心部の断面の土層確認を行った。

1～3区では、耕土直下で黄色土の地山が検出された。遺構はほとんど認められない。過去の調査でも城内は遺構の残りが悪く、江戸期以後に削平された可能性が高い。

横断の断割りは、場所により様相が異なる。4区では土塁幅もやや狭く、堀の掘削土を斜めに積み上げていた。いわゆる「掻きあげ」土塁である。一方、張り出し角部に近く、土塁幅も広い6区では、掻きあげ状に中心部を積み上げ、そこから外側へ水平方向の盛土を行い、土塁幅を広げていた。これにより、土塁上面にスペースを確保し、外側



坂本城跡（第8次） 土塁断割り土層断面図



7区北壁 土塁断割り状況（南から）



6区北壁・8区西壁 土塁断割り状況（南から）



8区西壁 土塁断割り状況（北東から）



出土土師皿（左、土塁流土内、右、3区溝内）

を水平に積み上げることにより城外側を急斜面にしても、土塁法面が崩れにくいようにしていた。

8区の土層からは、まず北側に盛土による小山を築き、そこから南側へ拡張するような順序で土塁を築いていったことが確認できた。5区に近いところでは、南へ順に小山を造りながら土塁の中心部を築いていた。これは土塁築造時の作業の単位と考えることができる。土塁張り出しの角部の小山から南へと築いていたと考えられ、そこが土塁築造時の基準になっていた可能性がある。

ただ、土塁下からは築城以前の地山が確認されている。坂本城跡南西部の土塁線の張り出しそのものは、意図的なものではなく、地形の影響と評価できる。

土塁の築造時期については、盛土内から遺物が出土しておらず、正確には不明である。ただ、6区で土塁の流土堆積中からほぼ完形の土師皿が出土した。土師皿は径16cmあり、16世紀前半のものと思われる。文献からの想定とも対応することから、廃城前後の遺物と考えられよう。

調査では、土塁の構造とその築造の順序を明らかにできた。軍事的な要所である土塁の張り出した角に櫓台状に土盛りを行い、そこを基点に南側へ次々に土盛りを行いながら土塁を築いていた。土塁張り出しの角部そのものについては、未発掘であり、その上面の利用状況などは不明である。しかし、この部分が要所として重視されていたと評価して良いであろう。

城郭では、このような土塁などの外側への張り出しや屈曲を横矢と呼ぶ。これにより城壁の死角をなくし、城を攻める敵方側面への攻撃が可能になる。横矢は戦国時代の16世紀半ば以降に発達し、姫路城など近世城郭にも受け継がれていく。播磨の山城では、永禄の後半から天正(1573～1592)以降に出現するとされる。坂本城跡の土塁の張り出しは自然地形の影響によるものであり、計画的に設定したものではなかった。しかし、土塁上面幅を広く取り、築造時の基準とするなど櫓台的な使用が想定された。16世紀初頭には廃城となっており、横矢への指向を伺うことのできる初源的な事例と評価できる。

本来、坂本城は政庁としての性格が強く、戦闘には不向きな平城であった。それにもかかわらず、赤松氏と山名氏の激しい攻防戦の過程で防禦技術を発達させていったと考えることができよう。



## 坂本城跡の下から見つかった円形周溝墓

—書写・構江遺跡—

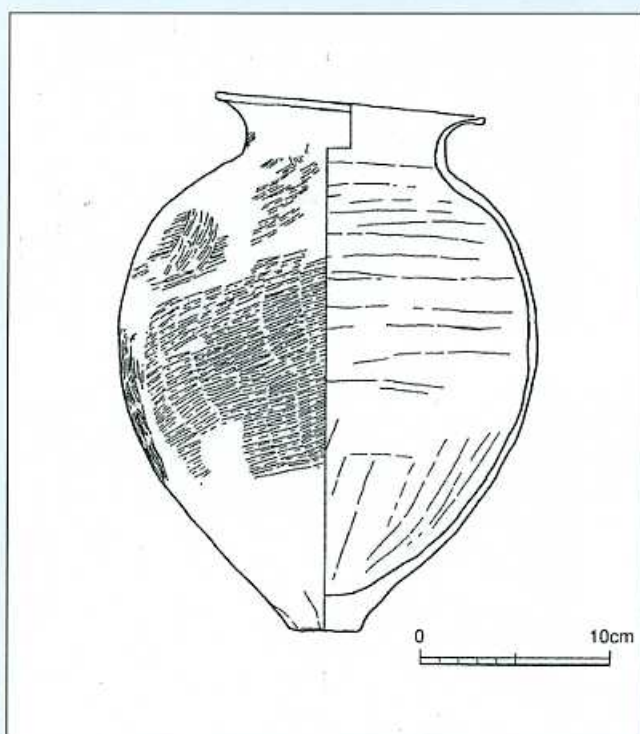
坂本城跡の土塁の下からは、弥生時代の墓も見つかりました。この墓は、周囲を円形に溝がとりまくことから、「円形周溝墓」と呼ばれるものです。同様に、方形に溝をもつものを「方形周溝墓」と呼んでいます。

埋葬を行った墓の中心部は、後の時代に削りとられ、周溝だけが残っていました。幅75～160cm、深さ30cm前後で、溝底は、北側が高く南側が低くなっています。墓の北西側約3分の1を確認しました。これを元に全体を復元すると、周溝内側で径約15mとなり、かなり大型の部類に入ります。周溝は、東側の調査区では見つからず、一部が陸橋状に途切れている可能性があります。溝の内部からは、祭祀用と思われる甕が完形のまま1点出土しました。その特徴から、弥生時代後期中頃(2世紀頃)のものと考えられます。

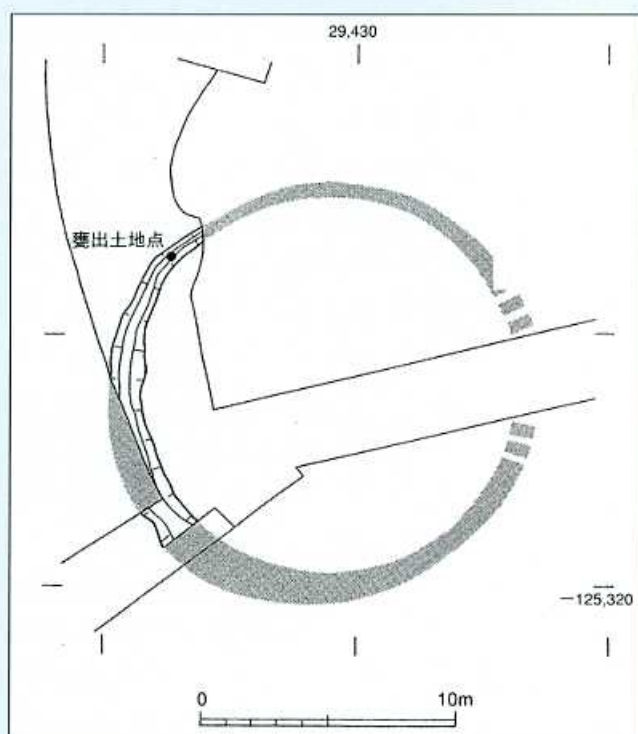
周溝墓は円形が備讃瀬戸地域、方形が近畿地方に祖系を持つ墓制です。この時期の播磨では、赤穂市の有年原・田中1号墓(径20m)・2号墓(径15m)に代表されるように、円形がやや優位と考えられています。西と東の大勢力に挟まれたこの播磨で被葬者はどのように揺れ動いたのでしょうか。



円形周溝墓（北東から）



円形周溝墓から出土した甕 (S=1:4)



円形周溝墓 平面図 (S=1:300)

## 2.特別史跡姫路城跡

(第186次)

内曲輪 姫路城防災センター整備

1. 所在地 姫路市本町68番地
2. 調査面積 510㎡
3. 調査期間 平成12年1月20日～平成12年3月27日
4. 担当者 多田、森

姫路城防災センター建設予定地について、遺構の確認調査を実施した。建設予定地部分を1区とし、そこから西側の西の丸高石垣までに2本のトレンチを設定した。

調査地点は内曲輪の三の丸北部にあたり、二の丸正面口である「菱の門」前面のかざし石垣の南側に位置する。江戸時代の絵図によれば、南北方向の石垣により上下二段にわかれていた。東側下段は、大手門から三の丸中央部を南北に走る通路である。西側上段は、藩主の居館が所在した「御居城」へと通じていた。この二つの通路が、調査区内北部で石階段により合流し、「菱の門」へと続いていた。

1区では、この南北石垣が現地表より約2m下で検出されている。しかし、江戸時代の絵図に見える石階段は確認できず、赤色の粘質土で表面を化粧したスロープとなっていた。上段通路は、表土の一部が地表下約20cmで認められ、ほぼ現地表と同じ高さであったことが確認できた。このことから、石垣はほとんどが近代の軍隊時代に天端から約1.5mまで石を抜き取られ、大規模な破壊を受けていたとみられる。石階段もこの段階で一度撤去され、その後、スロープ状の通路に改変されたのであろう。

「菱の門」のかざし石垣下部の盛土造成については、城郭造成時に地山を削りだして出た粗割り砕石を、外側に土手状に盛り上げ、その内部に砕石層とやや粘質土の混じった礫層を交互に水平方向に12層積み上げていた。排水性を良くするとともに、石垣の重量を均等に支えるための工夫と考えられる。一方、そのほかの近代の盛土は、斜め方向に土砂を造成していた。

絵図から想定された石垣は、そのほとんどが軍隊時代に大きく破壊を受けていた。石階段もこの段階で撤去され、その後、スロープ状の通路に改変された可能性が高い。また、石垣下の盛土造成調査からは、平山城における石垣などの重量構造物基礎部分の造成手法について明らかにできた。



調査地の位置図（「姫路北部」）



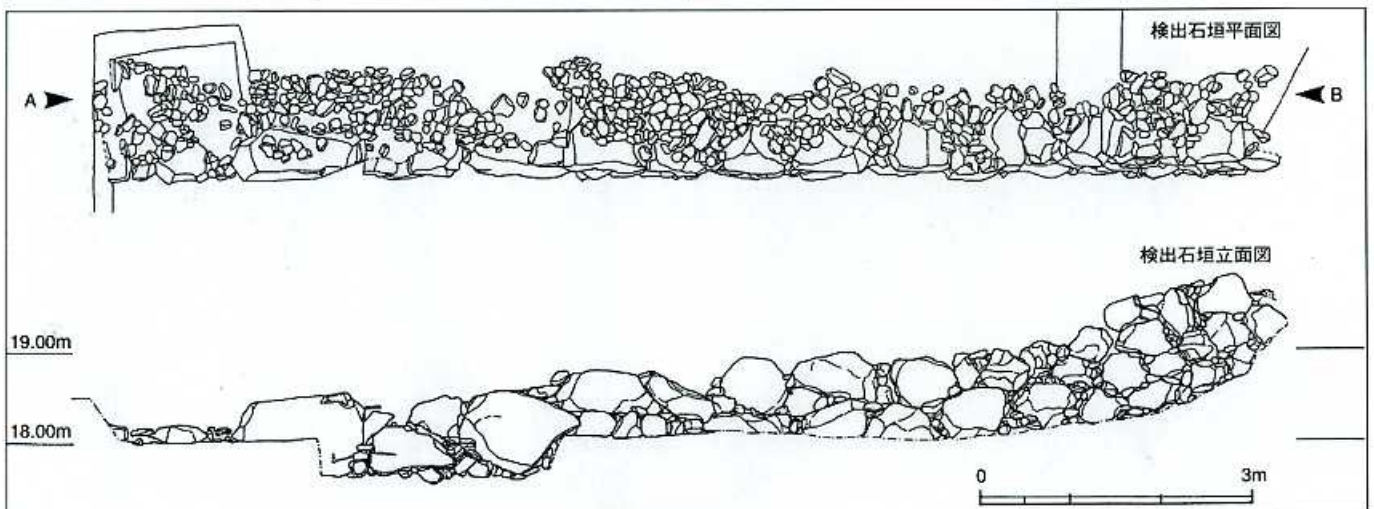
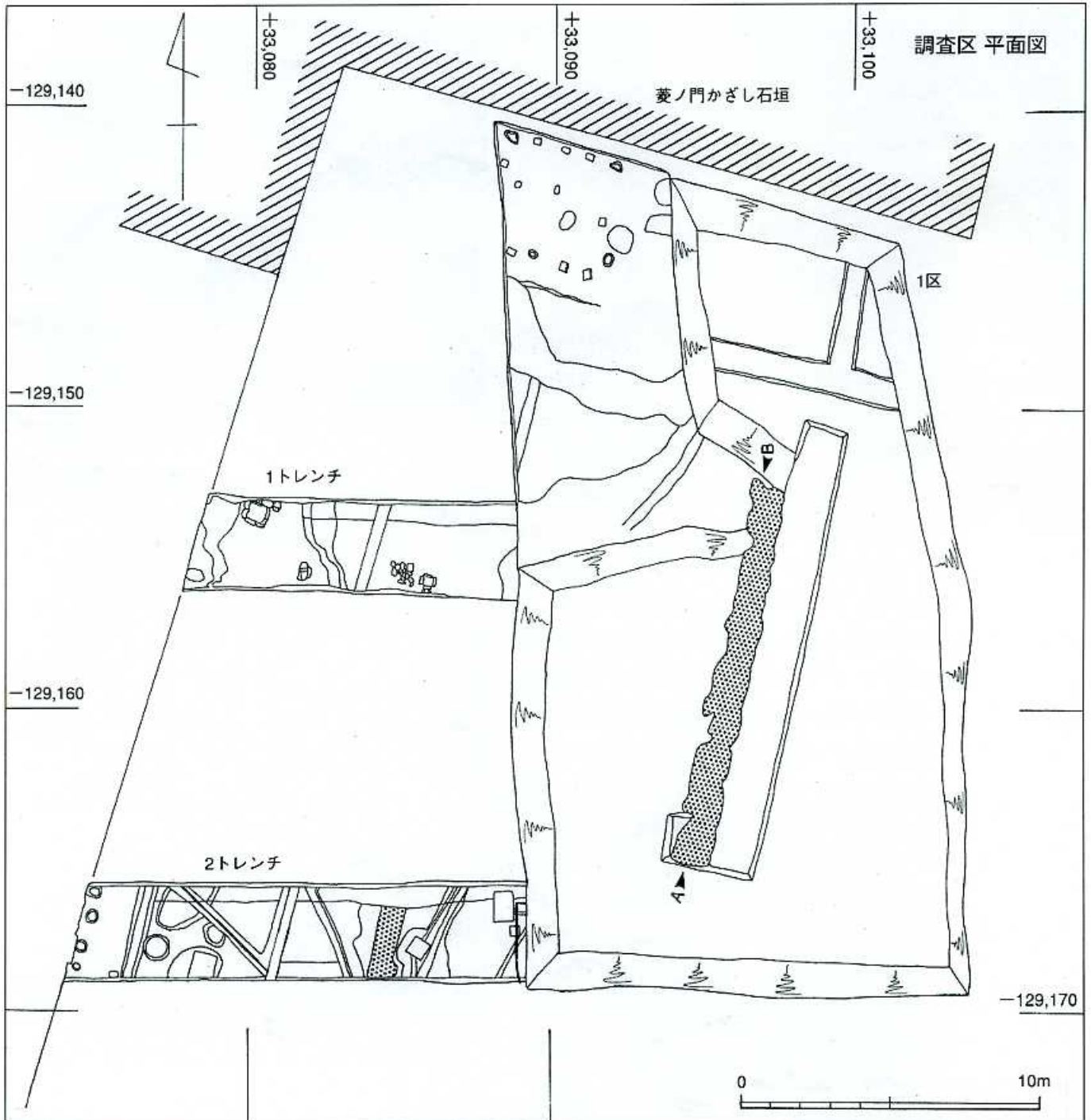
石垣検出状況（南東から）



石垣検出状況（北東から）



盛土造成状況（南西から）



### 3.特別史跡姫路城跡

(第180次)

A地区 都市計画道路城南線整備

1. 所在地 姫路市本町68番地
2. 調査面積 800㎡
3. 調査期間 平成11年7月13日～平成12年1月14日
4. 担当者 森

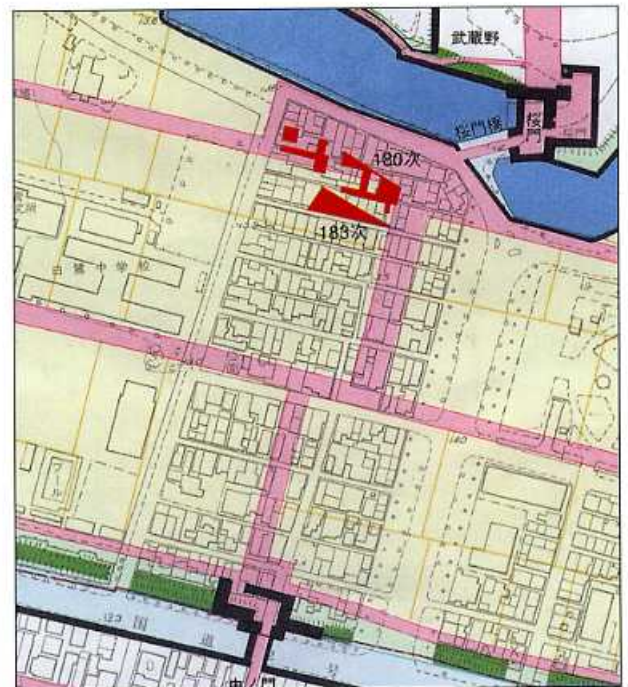
特別史跡姫路城跡A地区（通称：白鷺町）における道路整備事業に伴い、発掘調査を行った。江戸時代後期・酒井氏時代の城下町絵図『姫路侍屋敷図』と対照すると、今回の調査個所の大部分は、大手門にあたる桜門南側の広場に該当している。この広場は中ノ門に至る南北街路とつながり、街路の西側には家臣の馬を繋いでいたとみられる「御厩」の記載がある。なお、調査個所の東端付近が厩敷地の北東隅部に相当すると考えられる。

調査の結果、埋設管路などの攪乱を免れた個所では、複数の遺構面が残っていることがわかった。江戸時代の遺構には、桜門南側の広場と厩敷地とを区画する石組み溝、厩建物の遺構と考えられる柱穴の根石などがある。石組み溝は内法幅65～70cm、現存最大高40cmで、調査個所東端まで一直線に走る。従って、厩敷地の北東隅部は今回の調査個所よりさらに東側に位置する可能性が高い。

江戸時代以前の遺構としては、素掘りの南北溝がある。断面はV字形で、上幅1.6～1.7m、深さ70～100cmを測る。内部からは土師皿、土塼、備前焼播鉢、瀬戸・美濃焼灰釉皿、中国製の染付碗などが出土しており、16世紀後半期の遺構と考えられる。池田輝政による城下町整備以前の「初期城下町」に関連する可能性があり、注目されよう。



調査地の位置図（「姫路南部」）



『姫路侍屋敷図』と対照した調査個所の位置図



素掘り南北溝断面（南から）



石組み溝・厩建物遺構（西から）

## 4. 特別史跡姫路城跡 (第183次)

A地区 家老屋敷跡公園整備(便益施設)予定地

1. 所在地 姫路市本町68番地
2. 調査面積 382㎡
3. 調査期間 平成11年12月9日～平成12年3月9日
4. 担当者 森



調査地の位置図(「姫路南部」)

調査箇所は第180次調査地のすぐ南側にあたり、『姫路侍屋敷図』では「御厩」敷地の中央付近に該当している。

今回の調査では、最上部で検出される遺構の保存状態確認を目的とした。調査の結果、遺構の分布は比較的散漫であったが、建物跡1棟、素掘りの井戸1基、瓦組み遺構1基などが見つかった。建物跡は南北方向の河原石列を5条並べ、礫混じりの土で石列間を充填して基礎を構築している。石列の南側には東西方向に半間間隔で礎石を配していた。検出部の規模は東西約3.4m、南北約3.8mで、基礎の構造から蔵の可能性が考えられる。また、素掘りの井戸は径約85cmの円形の掘方を持ち、上部に黄色の粘土を塗っていた。

今回の調査箇所は既の建物より南側に相当するものと考えられる。この部分の土地利用状況については、現時点では不明の部分が多い。今後、厩が存在した段階の遺構(17世紀中葉以後)とそれ以前の武家屋敷地段階の遺構とを識別した上で、敷地全体の構造やその変遷を考えていきたい。

## 5. 特別史跡姫路城跡 (第185次)

大手前公園園路整備

1. 所在地 姫路市本町68番地(大手前公園)
2. 調査面積 63㎡
3. 調査期間 平成11年12月16日～平成12年3月6日
4. 担当者 多田、森



調査地の位置図(「姫路南部」)

江戸時代の絵図によれば、大手前公園は城下町武家屋敷地区に位置し、南辺部には東西方向の街路が走っていた。

今回、公園の園路整備に先立ち、街路の正確な位置と残存状況を確認するため、幅3m×長さ10mで南北方向のトレンチを3本設定し調査を実施した。

1・2トレンチでは、現地表下約1mで街路の可能性のあるしまり良好な面が検出された。ただ、屋敷境の側溝などが確認できず、近代以降の練兵場である可能性も残る。下層では、奈良・平安時代～中世の溝やピットなどが見つかり、播磨国府との関連が推定される。

3トレンチは、地下駐車場工事の影響がおよび、顕著な遺構は確認できなかった。



1トレンチ(北西から)

## 6. 特別史跡姫路城跡

(第184次)

大手前公園地下連絡道建設予定地

1. 所在地 姫路市本町68番地
2. 調査面積 207㎡
3. 調査期間 平成11年12月10日～平成12年2月24日
4. 担当者 多田

お城本町再開発ビルと大手前公園地下駐車場との地下連絡道路の予定地について調査を行った。計画範囲のうち城南20号線の中央部については、下水道本管などにより既に攪乱を受けている。そこで、調査は城南20号線南側の歩道部と大手前公園内において実施した。

城南20号線地区は12㎡ある。攪乱が多く、江戸時代の状況については明らかではない。下層ではピットなど播磨国府に関連する可能性のある遺構がわずかながら確認されている。

大手前公園地区は95㎡あり、地下道の予定範囲を1区、建設に伴う下水管移設予定地を2区・3区とする。

1区・2区とも調査範囲の北側約8mは地下駐車場工事の影響を受けていた。さらに1区中央には、径4.4mのコンクリート製貯水槽や南北方向の下水管が通り、遺構の残りは良好とはいえない。南東隅には黄色土の地山面が一部検出され、近世以前のピットが6基検出されている。

2区上層では、しまり良好な細砂層が検出されている。これは、江戸時代の東西街路面の可能性もある。ただ、絵図などから想定される武家屋敷との境界側溝が検出されておらず、近代の練兵場の可能性も考えられる。

下層では平安時代の土坑2基とピット、北側への落ち込みの南辺が確認された。落ち込みは深さが検出面より1mあり、規模は北端が攪乱により不明ながら南北4m以上ある。埋土は黄褐色の礫まじりの砂質土で、底面は平坦となり水の溜まった痕跡は見られない。ゴミ穴などの大型土坑と推定される。内部から中世末の土塼や備前焼播鉢などが出土した。近世城下町以前の播磨府中段階の遺構と評価できる。播磨国府関連の遺物としては、土坑内の混入品であるが、均整唐草文の軒平瓦（播磨国府系瓦・本町式A型）の小片が見つかった。

3区も地下駐車場工事の影響がおよんでおり、遺構は確認できなかった。



調査地の位置図（「姫路南部」）



1区全景（北から）



2区全景（北西から）



2区東壁土層状況（南西から）

## 7.特別史跡姫路城跡

(第181次)

市道城南20号線電線共同溝予定地

1. 所在地 姫路市本町68番地
2. 調査面積 195㎡
3. 調査期間 平成11年8月6日～平成11年12月10日
4. 担当者 多田

お城本町地区の再開発事業に伴い、市道城南20号線においても電線地中化が行われる予定である。今回は、そのうち御幸通りとの交差点から県道砥堀本町線までの159mについて、幅1.5mで発掘調査を行った。

1区は東西34mあり、道路面から約1.3mで地山が検出された。この面でピットや幅2.6mの南北溝(溝2-03)が見ついている。溝からの遺物の出土量は少ないが、南側の発掘調査で発見された奈良～平安時代の溝へと続くとみられる。播磨国府城の区画溝と推定される。

また、江戸時代の面では、武家屋敷の庭園に伴うと見られる池状の遺構が検出された。内部は粘質土の堆積があり周囲は護岸を兼ねた河原石の石敷となる。

2区は東西34mあり、素掘りの井戸や奈良～平安時代のピットなどが確認された。

3区では4区へと続く大型土坑の西端が見ついている。

4区は東西35m。西部は東西34mにわたり、3区から続く厚さ40cm以上の粘質土の堆積があり(SX2-03)、大型の池状遺構が存在したと見られる。この池状遺構の埋没直前の層からは、11世紀前半頃のほぼ完形の土師皿や托状皿、椀、杯などが多量に出土している。これも国府に関連する遺構と考えられる。

その上から掘り込まれた江戸時代初期の土坑(SX2-02)からは、唐津焼の椀・皿や備前焼の徳利や播鉢、軟質施釉陶器のほか土師皿や焼塩壺などが出土している。

4区東端では、江戸時代の南北方向の石組溝が検出された。溝は幅1.1m、深さ40cm。好古堂など公的施設が存在した地区と街路との境界溝と推定される。

調査範囲の状況は、全体に攪乱を多く受けており、遺構の残りは良いとはいえない。江戸時代の武家屋敷関連の遺構は、池状遺構などが確認されただけである。しかし、下層からは、播磨国府関連と推定される溝などの遺構や平安時代中期の遺物などがまとまって出土した。



調査地の位置図(「姫路南部」)



1区①南北溝(溝2-03)(北西から)



4区①大型土坑土層状況(SX2-03)(北東から)



4区①大型土坑(SX2-03)出土土師皿・托状皿

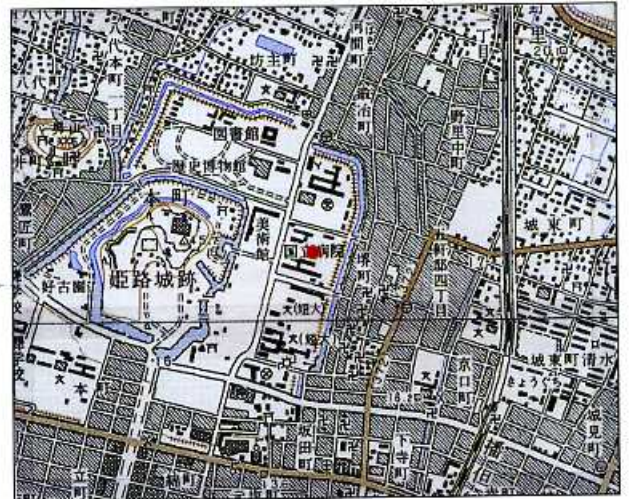
## 8.特別史跡姫路城跡

(第179次)

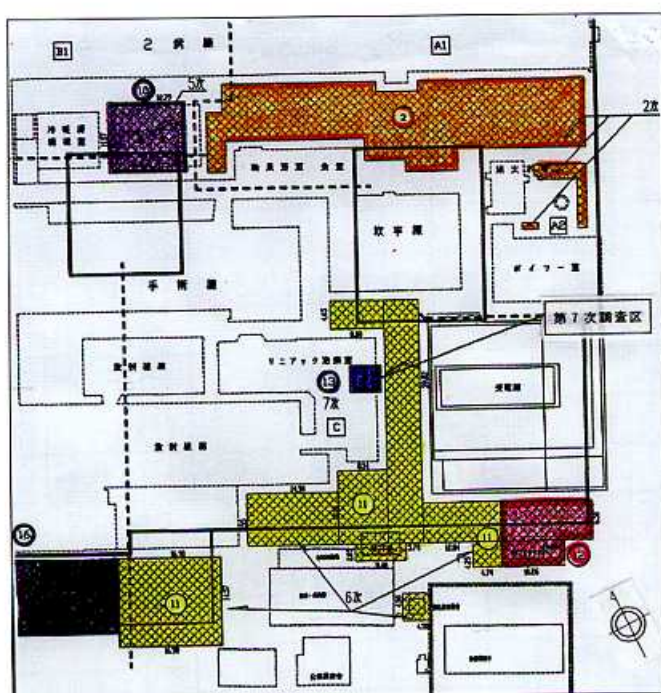
国立姫路病院更新整備 第7次

1. 所在地 姫路市本町68番地
2. 調査面積 64㎡
3. 調査期間 平成11年5月7日～平成11年7月5日
4. 担当者 山本

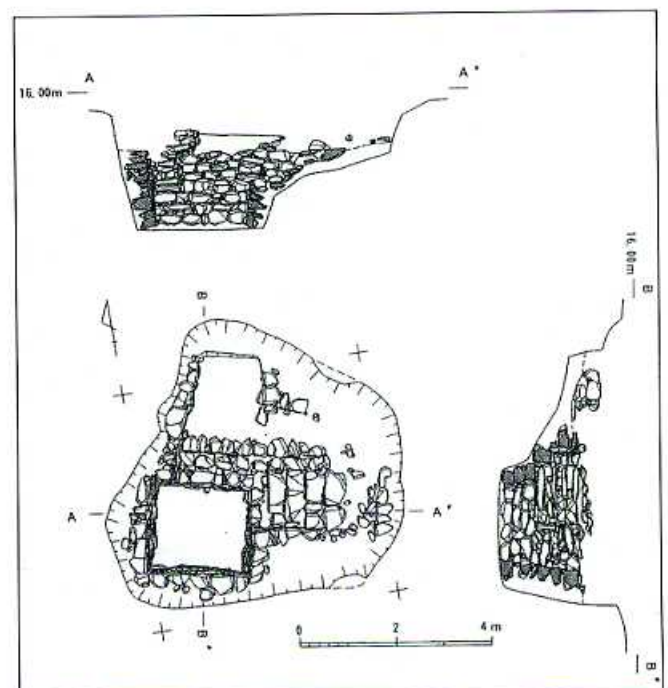
今回の発掘調査は、昭和58年度にリニアック治療棟新築工事に伴う調査で、姫路城下ではあまり例を見ない大規模な石組遺構が検出され、設計変更による保存措置の採られた個所の再調査である。当該地は、東部中曲輪に位置し、付近には中級武家屋敷が軒を連ねていた。酒井氏時代中期の城下町絵図によれば、「高須茂右衛門」宅に該当し、石組み遺構は敷地西北の奥まった一画に位置する。石組み遺構は、6.0m四方の略方形の大きな掘方を有し、最深部で旧生活面から3.15mを測る。この掘方の西南隅下底部に、現状で1.9m×2.15m、深さ1.65mの方形石組みを設け、水溜拵の機能を持たせており、一種の大規模井戸の様相を呈する。さらに、東壁北半部を切り込む形で幅1.2m、長さ約3m、現状で5段分の比較的緩い石段を設けている。また、石組み北壁にも現状で3段分の石段が認められ、これは踏み代がやや短いあるいはあるが、北方からの導線も考えられるところである。出土遺物および石組み構築技術から見て、江戸時代初期に構築され、18世紀前半頃に機能を停止したものと考えられる。本石組み遺構の性格を考える上で、清水門跡整備事業で検出された大型石組み井戸(「播磨十水」)の一つに数えられる名水「鷺の清水」が類例として挙げられるが、こちらは覆屋・雨落溝・井筒を備えている等、ややグレードが高いようである。本石組み遺構の用途としては、今のところ、①清水、②防火用水、③多目的用途の下の井戸、④②・③の複合施設等、複数の仮説が考えられよう。



調査地の位置図(「姫路北側」)



国立姫路病院調査区位置図



石組み遺構平面・断面図



## 9. 特別史跡姫路城跡 (第182次)

西の丸 防災工事

1. 所在地 姫路市本町68番地 (姫路城跡西の丸)
2. 調査面積 41㎡
3. 調査期間 平成11年10月2日～平成11年11月30日
4. 担当者 多田



調査地の位置図 (「姫路北部」)

防災施設工事に伴い、西の丸においてポンプ室の増築と長局の東側沿いの給水管の延長が計画された。

ポンプ室は西の丸中央のやや東寄りに位置する。調査では表土下5～10cmで岩盤を検出した。長局沿いでは、南端ワの櫓付近で長局にそって調査を行った。調査区全体に厚さ約30cm以上の瓦片の堆積があり、鯰瓦も含まれていた。近代以降の長局修理工事時の廃棄瓦と推定される。江戸時代の遺構については確認することができなかった。

従来から西の丸北部は、鷲山を削って造成したといわれていた。今回、その範囲が西の丸の中部にまで広がっていたことが確認できた。



鯰瓦の出土状況 (東から)

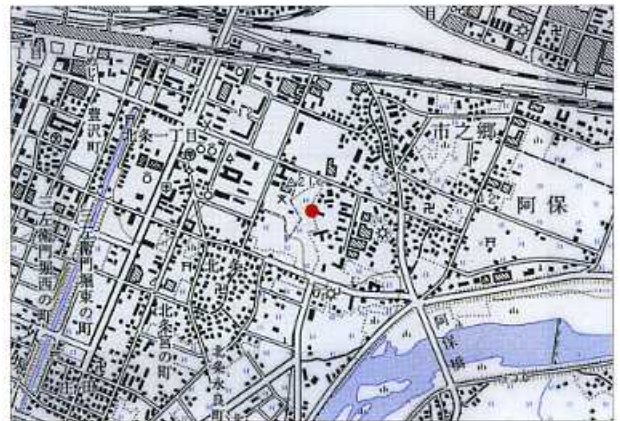
## 10. (仮称)阿保土地区画整理事業地内遺跡 (第1次)

(第1次)

1. 所在地 姫路市阿保甲他
2. 調査面積 458㎡
3. 調査期間 平成11年10月29日～平成12年3月17日
4. 担当者 大谷

JR姫路駅の南側は、姫路の新しい玄関として区画整理など都市基盤整備が急速に進んでいる。この地域の東部—阿保地区(事業面積89.3ha)で新たな区画整理が計画された。事業地の周辺では、各種開発に伴って北条遺跡ほか数遺跡を確認している。このことから、事業に先立って遺跡の有無を確認するため4ヶ年の調査を計画した。

本年度の調査は、事業地西部約31haを対象とし、試掘坪(2m×2m)84坪を設定した。西部では、旧河道と考えられる砂礫層が見られ、遺跡の存在する可能性はほとんど無いと判断できた。一方、東部では、安定した黄褐色土ベース上に鎌倉～室町時代と思われる溝・井戸などの遺構を新たに確認し、阿保遺跡第1地点と命名した。



調査地の位置図 (「姫路南部」)



第100坪検出の溝 (南から)

# 11. 北宿遺跡

(第1次)

- 1. 所在地 姫路市別所町北宿
- 2. 調査面積 686㎡
- 3. 調査期間 平成11年10月13日～平成12年3月27日
- 4. 担当者 小柴

北宿遺跡は、奈良～平安時代に古代山陽道沿いに設置された駅家のうち「佐突駅家」に比定されている。駅家とは、都と地方を往来する官吏の宿泊や馬の交換のほか、迎賓館的機能も備えていたと考えられる官営施設である。今回、遺跡内で下水道工事が計画され、初めて発掘調査を行った。

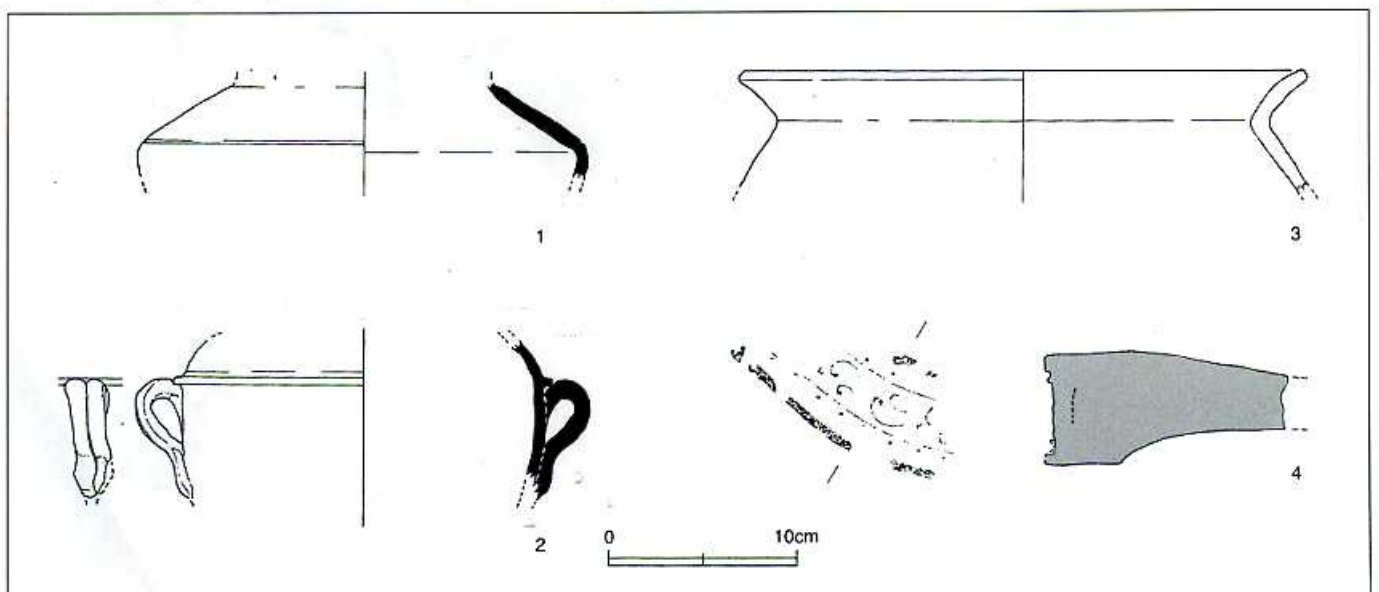
調査は幅約90cm、総延長約700mの範囲で、路線毎に右図のとおり調査区名を設定した。調査の結果、1区では、平安時代の溝を2条確認した。溝からは、古代瓦、須恵器などが出土した。また、江戸時代山陽道とされる里道との交差部分で、道路状盛土を検出した。3区の南端、4区全域でも同じような盛土を確認した。また4区では、盛土の下から南北方向の石組み暗渠を検出し、江戸時代の平瓦片が出土した。このことから、盛土状遺構は江戸時代山陽道と想定される。5区からは、奈良～平安時代の須恵器、土師器甕、「北宿式軒平瓦」などが出土した。この瓦は、主に古代播磨国内の公的な建物に使用されたと考えられている「播磨国府系瓦」の一種であり、北宿遺跡を「佐突駅家」と位置づける根拠にもなっている。6・7区は、煉瓦工場による削平を受けていた。



調査地の位置図（「加古川」）



調査区の配置図（S = 1 : 5,000）



出土遺物実測図（S = 1 : 4） 1, 2. 須恵器(1区SD03) 3. 土師器(5区) 4. 北宿式軒平瓦(5区)

## 12. (仮称)別所土地区画整理事業地内遺跡

(第14次)

1. 所在地 姫路市別所町小林
2. 調査面積 342㎡
3. 調査期間 平成11年3月31日～平成11年6月28日
4. 担当者 小柴



調査地の位置図（「加古川」）

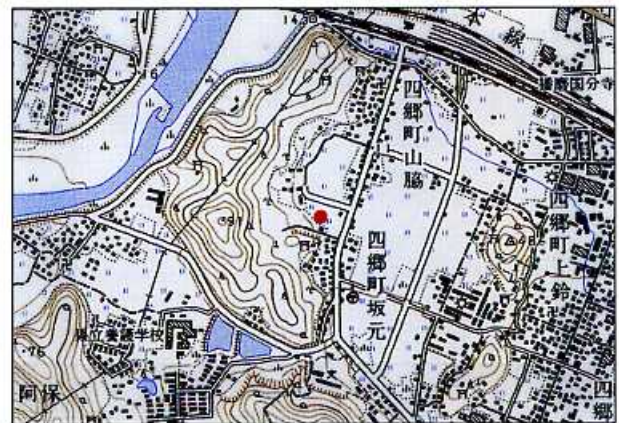
別所土地区画整理事業地内では、平成2年度から継続して発掘調査が行われてきた。これまでに古墳～江戸時代頃の遺跡、旧石器～弥生時代の遺物を確認している。第14次にあたる今回は、幅6mの範囲で調査を行った。

見つかったのは、江戸時代の柱穴、溝、土坑、素掘り井戸などである。このうち土坑の1つは、径約1.5m、現存深40cmで、江戸時代初めの土師皿、土鍋、備前焼播鉢、唐津焼皿、瓦、下駄が出土した。素掘り井戸は、径約1m、現存深3.3mを測る。検出面で、井戸を囲むように3個の川原石が並んでいたことから、石組みの井桁が存在した可能性もある。出土したのは、江戸時代初めの備前焼播鉢、唐津焼皿、瓦質火舎(火鉢)、瓦などである。そのほか遺物の中には、奈良～平安時代の「毘沙門式軒丸瓦」が混じっていた。この瓦は、前項の北宿遺跡で見つかった「北宿式軒平瓦」と同じく、「播磨国府系瓦」の一種である。また、調査区の北端から検出した溝からも、江戸時代の巴文瓦などに混じって、奈良～平安時代の須恵器片が出土した。今回の調査では、江戸時代以前の遺構は確認されておらず、これら古代の遺物は、調査地の北側に位置する北宿遺跡で使われていたものと考えられる。

## 13. (仮称)埋蔵文化財センター建設予定地

試掘調査 (第1次)

1. 所在地 姫路市四郷町坂元
2. 調査面積 23㎡
3. 調査期間 平成12年3月13日～平成12年3月31日
4. 担当者 小柴



調査地の位置図（「姫路南部」）

埋蔵文化財センター建設予定地は、今のところ遺跡の範囲に該当していない。しかし、南側には、県指定史跡の宮山古墳が近接している。この古墳は古墳時代中期の円墳で、3基ある竪穴式石室からは、朝鮮半島からもたらされた垂飾付耳飾をはじめ、ガラス玉、太刀など豪華な副葬品が発見され、出土遺物が国指定重要文化財となっている。このような遺跡の存在から、建設予定地内にも集落や群集墳など遺跡の存在が想定された。このため、建設工事に先立って、遺跡の有無を確認することとなった。

調査地の現況は、水田や畑として利用されている平野部と、竹林などの丘陵部にわかれている。そこで、調査は2m×2m、または1m×1mの試掘坪を平野部に6ヶ所、丘陵部に2ヶ所、計8ヶ所に設定して行った。その結果、試掘坪の範囲では、建物跡など遺構の存在は確認できなかった。遺物は、古墳時代～中世の須恵器、土師器、中世の白磁椀などが出土したが、いずれも小片で出土量も少なかった。堆積していた土層や地形も考慮すると、平野部に遺跡が存在する可能性は少ない。ただ、丘陵部に近い試掘坪ほど古墳時代後半の遺物が増加していることから、丘陵部には、後期古墳群が存在する可能性がある。

## 14. (仮称)姫路駅周辺第4地点遺跡 (第2次)

1. 所在地 姫路市駅前町・朝日町
2. 調査面積 1,000㎡
3. 調査期間 平成11年5月20日～平成12年1月28日
4. 担当者 中川

今年度の調査は平成10年度に実施した第1次調査の下層にあたる第2遺構面を1区、南北に延びる都市計画街路を2区として実施した。

1区では古墳時代後期の流路、平安時代後半の木組み井戸2基、16世紀代の流路、河道、土坑などを検出した。

古墳時代の流路は調査区の東端で検出された。調査区の東側は攪乱による削平が激しく、流路もかなり削平を受けていた。須恵器杯身・杯蓋、土師器甕などが出土した。遺物は流路中にもかかわらず、まったく磨滅していないことから近辺に同時期の集落の存在が推定される。

平安時代後半の木組み井戸は調査区のほぼ中央で2基が切りあった状態で検出された。2基とも方形の縦板組みで1辺約70cm、深さは遺構検出面から約1mである。切られた方の井戸からは白磁皿、土師皿と共に「符籙團」と墨書された呪符木簡が出土した。また井戸底に突き刺さった状態で竹筒も出土しており、これらのことから井戸の廃絶に際して「息抜き」を行った可能性が考えられる。中世の民間信仰に関する貴重な資料を得ることができた。

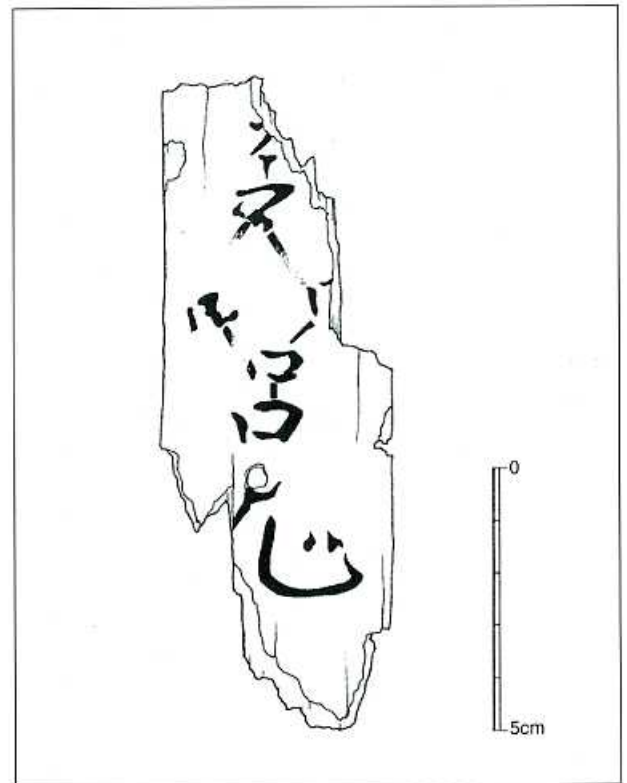
調査区の西端で検出された16世紀代の流路は幅10m、深さは最も深い個所で検出面から2mである。遺物は最下層の青灰色粘土層から土師皿、土塙、漆碗、下駄、曲物などが出土した。姫路城下町形成前の様相がわずかではあるがうかがえる資料である。また同時期の遺構は今回の調査では確認することはできなかったが、付近に存在することは十分考えられる。

河道は幅25m、深さは検出面から2m以上を測る。その規模から遺跡の東を流れている市川の支流と考えられる。2区においてもこの河道の一部を確認した。遺物は出土しなかった。

2区では第1遺構面において、前年度の第1次調査で見つかった江戸時代の田畑の耕作痕跡の続きを検出した。第2面においては調査区の北側で土坑を検出したが、遺物が出土していないため時期は不明である。



調査地の位置図（「姫路南部」）



呪符木簡



井戸検出状況

## 15. (仮称)姫路駅周辺第4地点遺跡 (第3次)

NTT管路新設

1. 所在地 姫路市駅前町
2. 調査面積 36㎡
3. 調査期間 平成11年10月4日～平成11年10月8日
4. 担当者 中川

調査区は第2次調査地点に隣接し、東西4m×南北9mである。現況は姫路駅周辺土地区画整理事業に伴い造成されているが、以前は旧国鉄関連の建物があった。そのため調査区の一部は建物基礎などにより破壊を受けていた。

調査区の土層は盛土、耕土、床土を経て砂礫層に至る。盛土はコークス殻混じりの上層と大きな円礫を含む下層の2層に大きく分けられる。上層の盛土には汽車土瓶などの近代遺物が混じることから、明治時代の鉄道開通以降のものであることがわかる。それに対して下層の盛土には遺物が一切含まれていない。また盛土直下に耕土があり付近一帯にこの層が確認できることから鉄道開設時の造成土であると考えられる。

盛土下の耕土は平成10年度の第1次調査で確認されたものと一連のものであり、姫路城外には田畑が広がっていたことがうかがえる。耕土からはわずかではあるが江戸時代末～明治時代にかけての染付片などが出土していることから、鉄道が開通する直前までこの付近一帯は田畑であったと考えられる。床土下の砂礫層においては遺構、遺物とも確認できなかった。



調査地の位置図（「姫路南部」）

## 16. (仮称)加茂西土地区画整理事業地内遺跡

試掘調査 (第1次)

1. 所在地 姫路市飾磨区加茂
2. 調査面積 52㎡
3. 調査期間 平成12年3月17日～平成12年3月31日
4. 担当者 秋枝

姫路市飾磨区加茂地区において土地区画整理事業が計画された。事業予定地には、隣接して石ヤ田遺跡（平安時代後半の集落跡）と加茂遺跡（室町時代の構江跡）がある。

平成10年度に分布調査を実施し、事業予定地北部、石ヤ田遺跡の西端部推定地で磨滅の著しい土器細片を採集した。事業予定地に2m×2mの試掘坪を13箇所設定して、遺跡の確認に努めた。調査区の基本的な層序は、耕作土(厚さ20cm)・床土(厚さ10～15cm)をへて、黄色砂層・砂礫層・粘土層などとなり、耕作土上面から0.8～1.2m下で砂礫層に達する。事業予定地北部で石ヤ田遺跡の西端部が確認されると思われたが、遺構は確認できなかった。土層の堆積状況からみると、旧流路か低湿地の様相である。黄色砂層から磨滅の著しい土器細片が出土した。粘土層から木片が出土したが、土器が伴っていないので、この層の詳細な時期は不明である。事業予定地南部も北部と同様な土層堆積状況を示すことから、前記の旧流路か低湿地が南へ延びているのであろう。

今回の調査で遺跡が確認されなかったとはいえ、周辺部に数多くの遺跡があり、事業実施にあたり工事立会など慎重な対応が求められる。



調査地の位置図（「姫路南部」）

## 17. 古網干遺跡

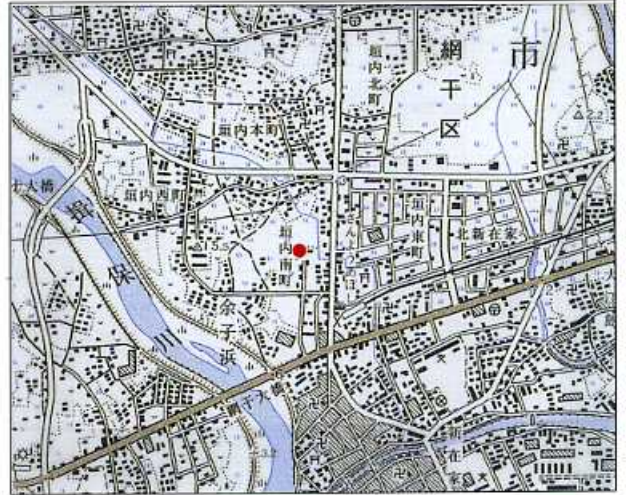
(第4次)

1. 所在地 姫路市網干区垣内南町
2. 調査面積 380㎡
3. 調査期間 平成11年5月7日～平成11年9月30日
4. 担当者 森、中川

古網干遺跡は姫路市の西端を流れる揖保川の河口左岸に位置している。遺跡は出土する遺物に他地域から搬入されたものが目立つことやその立地から中世の港湾に伴う集落であると考えられる。今年度は第3次調査で4区とした地区を対象として調査を実施した。

調査の結果3面の遺構面を確認した。そのうち礎石建物跡を検出した第1遺構面の調査は第3次調査で終了している。第2遺構面においては2間×3間の掘立柱建物跡を確認した。建物は調査区外に延びるため全容は不明である。また幅約1.2mの南北方向に走る素掘り溝を検出した。溝からは土師皿、土塼などの土器とともに牛などの骨が出土した。その溝を切るような形で主に貝を廃棄した大型の土坑を検出した。これらの遺構の時期は出土した遺物から15世紀代に属すると考えられる。

第3遺構面においては幅約1mの南北に走る素掘り溝を検出した。この溝からは貿易陶磁器、常滑焼、東播系須恵器、瓦器椀、瓦質土器、土師質土器、土師皿などの土器と「南无大日如来」と墨書された卒塔婆や櫛などの木製品が出土した。これらの遺物は12世紀末から13世紀前半のものと考えられる。第3遺構面は標高が約0mであるため、地下水位が高く木製品や動植物依存体などの残りが良好であった。中世の人々の生活を知るうえで貴重な資料を得ることができた。



調査地の位置図（「網干」）



第2遺構面全景（北から）



第3遺構面 溝出土土器



第2遺構面土坑断面

●こんなものでました●

## 黄泉の国に夜明けを告げる鶏形埴輪 (市指定文化財)

出土遺跡：白国・宮山古墳

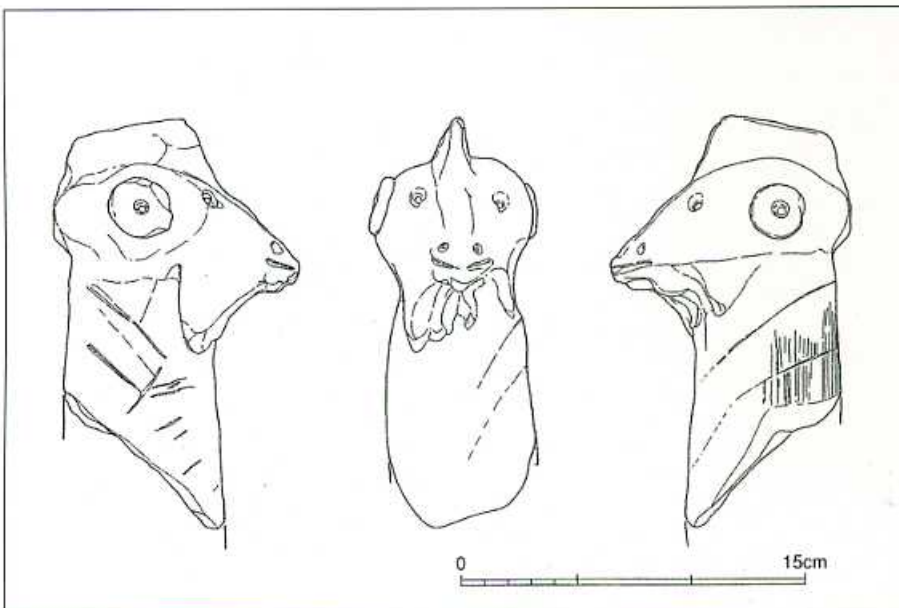
最近では夜明けに鶏の声を聞くこともほとんどなくなってしまいました。数千年の昔にアジアで家畜化されたといわれる鶏は、弥生時代には日本にも入ってきたようです。だれよりも早く夜明けを知らせることから、あの世（夜）とこの世（昼）とを往来できる動物と信じられ、神話にも「常世の長鳴鳥」として登場しました。

古墳に並べられた埴輪には、当時の人々が親しんだ動物をかたどったものがあります。こうした埴輪の中でも鶏形ものは早い時期から作られていました。死者の魂をこの世に呼び戻してくれることを願ったのでしょうか。

ここで紹介するのは、姫路市北部、白国の尾根にあった宮山古墳から出土したとされる鶏形埴輪です。残っているのは首から上の部分だけで、高さは17.9cm、くちばしの先から後頭部までの幅は10.6cmで、内部は中空になっています。実物とは顔のイメージが異なりますが、頭の上に「とさか」とみられる突起、あごの下に肉ひだが付けられていることから、鶏をかたどったものであることは間違いないでしょう。他の古墳の例では「とさか」をギザギザに作ったものも見られますが、この埴輪のものは板状で、ややリアルさに欠けるといえるかもしれません。しかし、目・鼻はもちろん、頭部側面の後方に円形の粘土板を貼りつけて耳たぶを表し、首の部分には羽根の表現と思われる線刻をほどこすなど、鶏の特徴を忠実に写そうとしたことがうかがえます。



出土地点の位置図（「姫路北部」）



実測図（S=1:3）





# TSUBOHORI

平成11年度(1999)

## 姫路市埋蔵文化財調査略報

---

平成13年(2001)3月30日

発行 姫路市教育委員会 文化部 文化課

兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷 松尾印刷株式会社

兵庫県姫路市南新在家9-7